

結 章 日本体育大学の課題と展望

　　結びにかえて、

明治二十四年八月、国民体育の奨励を御旗に誕生した体育会（翌二十五年六月に日本体育会と改称）は明治二十六年三月、その経営方針を一部変更した。日本体育会体操練習所を開設して、体育会の設立当初には予定していなかった学校の体操教員養成に着手したのである。ここに日本体育大学の歴史がはじまるわけであるが、経営方針の変更は本会の命運を決することになった。会員制をもって運営された本会には常に経営の危機がつきまとい、体操教員養成機関を有していたために国からの補助金の交付を得ることができたからである。明治三十二年三月、文部省は日本体育会に対して向こう五年間にわたって毎年一万円の補助金を交付することを通知する。もちろん、国庫補助金の交付には条件が付けられた。それは日本体育会体操練習所を整備・充実させ、模範体操場を設置せよとの内容であった。設置された模範体操場は体操練習所の運動場であり、運動施設であったのだから、国からの条件はすべて体操教員養成機関たる日本体育会体操練習所に対してであったといえよう。国庫補助を機会に体操練習所は単なる練習施設の段階を脱して各種学校として改組されているのである。ともあれ、この補助金によって日本体育会の財政は安定的方向へと向かうことになるのである。

日本体育会体操練習所は各種学校として改組され、日本体育会体操学校と改称された。この学校は国の強力なバックアップを得て、多くの優れた体操教員を輩出していく。小学校、中学校、高等女学校、師範学校などの教員を養成したのだから、日本体育会体操学校は体操教員養成のための高等師範学校の役割を果たしてきたといわねばな

らない。また、国庫補助金が日本体育会に交付されていた五か年間は、私立学校でありながら、文部省の管轄下におかれ、多くの私立学校のように東京府の管轄下にはなかった。国立に準ずる学校としてその役割を担っていたといえよう。

国庫補助の打ち切りは日本体育会体操学校の社会的地位にマイナスに働くだけでなく、経営母体たる日本体育会の財政を大きく圧迫することになった。したがって、本会が国民体育の奨励を標榜して幾多の事業を続けてきたが、その事業の遂行が困難を窮めるようになる。結果として、日本体育会の事業としてその命脈を保つことができたのは体操学校の維持・経営だけとなったのである。その後、本会の財政の危機は体操学校の地方（荏原郡大井村）への移転を余儀無くさせてしまう。しかし、体操学校からしか収入が見込めない状態にあったのだから、頼みの体操学校からの収入が激減すれば、より一層本会の財政を圧迫することになるはずである。地方への体操学校の移転は入学志願者の減少を招き、本会だけでなく体操学校までもが存亡の危機に直面することとなった。

廃校の危機を脱した体操学校は専門学校への道を模索しはじめる。大正六年の『大学令』によって、多くの『専門学校令』（明治三十六年）に基づく私立学校が大学へと昇格していったことを目の当たりしたこともその模索の一因であった。各種学校から専門学校へと昇格させることが体操学校を大学へと発展させるための経路として映ったからである。専門学校への昇格は太平洋戦争が勃発した昭和十六年に達成された。したがって、日本体育専門学校は戦時色に塗り潰された歴史を刻むこととなっている。この時代、どのような学校であろうとも戦争に加担せしめられ、自らの学生たちを戦場へと送り出さねばならなかった。しかし、多くの学校は国の学徒出陣の命令が下るまで、積極的に戦場へと学生を赴かせることはなかった。体育専門学校は学徒出陣となる前にすでに繰り上げ卒業式

を挙行して、学生たちの出陣の便をはかっている。また、教育課程を改正して航空体育部・海洋体育部を設置して戦争従業に駆り出すための教育を行ったのである。この事實は、本学の歴史に深く刻み込まねばなるまい。

×戦前までの本学の歩みは総じて「戦争」とともにあったといえよう。「体育富強之基」をスローガンにして、国民体育を奨励し富国強兵をはかることに全力を傾注してきた。だから、一般には日本体育会体操学校は陸軍戸山学校が経営している学校と誤解されたのも無理からぬところであったといえよう。戦後、本会および日本体育専門学校関係者二名に「公職追放」の断が下るが、戦前の軍と本会との関係から推してみると、よくぞ二名に止まったといえそうである。それだけに、戦後の本会および本校の復興には困難が付きまとったといわねばならない。

戦後の復興は茨城県土浦の元海軍航空隊跡で開始された。この地で平和時における「体育」専門学校の在り方が検討され、新制体育専門学校へと脱皮しつつ、体育大学への昇格を図っていた。その結果、昭和二十四年三月に本邦初の体育大学の開校が認可され、九月に第一期入学生を招集して土浦キャンパスで入学式を挙行する。念願の大学への昇格を果たした本学であったが、この際においても「地方」の悲哀を経験した。二期生以降の入学者が期待できなくなったのである。当時、「体育」大学としてはその施設条件に恵まれていた。しかし、入学志願者にとって教育環境がよいことは本学の魅力とは映らなかつたのである。そのため、本学の発展は土浦という地方では望めないとの判断が下され、東京への復帰が実現する。深沢キャンパスは狭隘であり、体育大学のキャンパスとしては不満が残るけれども、適当なキャンパス候補地がなく、深沢へと舞い戻ることになったのである。この深沢への移転という決断は功を奏した。入学志願者が期待通りに増加し、大学経営の危機を脱することができたわけである。

深沢に復帰してからの日本体育大学は著しい発展を遂げてきた。体育学部には体育学科という一学科しか認められ

ずにスタートした本学に複数の学科が増設されるようになったからである。昭和三十七年の健康学科、四十年の武道学科、五十年の社会体育学科、四十六年の体育専攻科の増設に加えて、昭和五十年には大学院体育学研究所（修士課程）が設置されたのである。これによって、体育学部の入学生定員は大幅に増え、五、〇〇〇名を越える規模の体育専門の大学へと成長をとげるにいたっている。深沢キャンパスは狹隘を極め、当初、運動施設として建設された横浜・健志台キャンパスとの連動教育が余儀無くされている。一学部二キャンパスであるから、経費の無駄を覚悟しなければならぬ。しかし、だからといって、体育学部を広い健志台キャンパスへ全面移転するのがよいと断を下すには危険が多いといわねばならない。本学の移転の歴史がいみじくも語っているように、都心を離れることよって入学志願者の激減が予想されるからである。体育・スポーツに人気が集まるようになったとはいえ、体育系大学はかつてとは違って格段に増えており、その教育の質も本学に比して変わるところがない。今や本学の魅力は、その歴史と伝統の外に都心に本部があるという地の利しかないといわねばならない。健志台への移転問題は慎重の上にも慎重を重ねる必要があるであろう。

体育・スポーツを巡る状況はひとむかし前とは違った変化をみせはじめた。労働形態の変化に伴う運動不足を解消するために体育・スポーツが注目された時代を過ぎ、労働の疲れを癒すためのレクリエーションを奨励する時代を経て、スポーツそれ自体を目的にしてスポーツに汗する時代に入っている。労働の効率化を追求した結果、われわれは多くの余暇を日常的に確保することができたし、平均余命が延びたことよって定年後の長い人生という余暇をもつことになった。余暇とは労働から解き放たれた時間であるから、余暇を過ごすことは自己の自由になる時間を消費することを意味しよう。余暇という時間を消費する在り方としてスポーツをすることがあげられるが、ス

スポーツの機会を得るには金銭が必要になってくる。適当な運動は健康の維持・増進をはかり、老化を先送りすることにも通ずるのだが、楽しく運動をすること（リスポーツ）こそ余暇時間を消費するエースとならねばならない。

このように人生にとってスポーツは大きなウエイトを占めるようになった。スポーツを楽しむ場を巡って種々の業種が関わりを持つにいたった。スポーツ用器具メーカーだけではなく、建設業界、飲料品業界、服飾業界、医療品業界など、挙げればきりが無い程の業界がスポーツ産業に新規参入を図りつつあるのである。要するに、競技スポーツだけがスポーツであるとする時代はおわりを告げたといえよう。

競技スポーツに打ち込むことは怪我や内臓疾患等の疾病を覚悟しなければならない。競技スポーツをすることは健康を害することに通じ、スポーツは健康の維持・増進のためその特効薬であるとすると、これまでいわれ続けてきた考えを改めねばならないところに来ていといえよう。したがって、本学がこの世紀末を生き抜き二十一世紀に羽ばたくには従前から取り続けてきた方針を改める必要がある。新時代に対応しうる施策を講じて、来るべき世紀を力強く歩み続ける日本体育大学の雄姿を期待しつゝ、結びにかえよう。

♩ = 75

あ お げ と さ や ま き が と し て わ が に っ
 た い の が く り よ う は せ い そ う こ こ に
 きゅう じゅう よ - - - - も の の ふ ど も が ゆ め
 の あ と - り わ れ ら が
 ぜん と に ひ か り あ り -

寮 歌

- 一、 仰げ土佐山巍峨として
吾が日体の学寮は
星霜ここに九十余
武士どもが夢の跡
- 二、 御代は昭和の新天地
自治敬虔の旗あげて
かざすしるしの桜花
色あせ果てぬ花の色
- 三、 虚栄の夢に他人は酔う
ねむれる魂を醒まさんと
世に先がけて獅子吼する
世紀の叫びここに聞け
- 四、 努力の歴史輝きて
今隆盛の時は来ぬ
祝え千余の健男児
吾等が前途に光あり
吾等が前途に光あり

♩ = 120

あ げ ゆ く に ほ ん あ さ - み ど - り

ふ る き れ き し と で ん と う は 、 せい き あ

ら た - な ひ に - は え - て

か が や く に っ た い う ま れ た り

応援歌
あけゆく日本

呉 泰次郎 作曲

一、あけゆく日本 朝緑り
古き歴史と 伝統は
生氣新らたな 陽に映えて
輝く日本 生まれたり

二、望めば清し 富士の山
理想は広し 武蔵野の
深沢原頭 学び舎に
輝く日体 育ちたり

三、栄えある世界 若人よ
身心錬磨 雄々しくも
声高らかに 唄わんや
意気天を突く 日体大

応援歌
若き獅子

関沢忠重 作词
世川 勇 作曲

一、
旭光あさひきらめ焔えんく武蔵野むさしのに

集あついし学友がくともよ若獅子わかししよ
起おこつべきときは今いまなるぞ
日夜ひよる研鑽けんざんえし心こころと技わざを
いぎや競あそはん闘志たうしは燃もゆる
桜花おうかの旗風はたかぜ 堂々どうどうと
いぎ翔あそべいぎ行ゆけ若き獅子
日休ひやすみ日休輝ひやすみけ勝利しょうり

二、
霞かすみたなびく武蔵野むさしのに

集あついし学友がくともよ若獅子わかししよ
栄えいえある伝統でんどう担たんいつつ
鎧袖よろいそで一ひと触ふたてがみ上げて
いぎや競あそはん闘志たうしは燃もゆる
蒼あおき咆おたけ哮けい 堂々どうどうと
いぎ翔あそべいぎ行ゆけ若き獅子
日休ひやすみ日休輝ひやすみけ勝利しょうり



え ば - ら - - た い - く と の な ら ご ざ れ



ひ ご - と た っ し ゃ に な - る - か ら だ



む さ っ し ゃ れ く ろ い か い な に つ よ い い し

寮歌
荏原体育

一、荏原体育殿ならござれ

日毎達者になる身体

見さっしやれ

黒いかいなに 強い意志

二、初めはつらいと思つたことも

馴れてしまえば楽なもの

見さっしやれ

国士気取りの 伊達姿

三、強い身体にや情がこもる

踊るダンスに夜の曲

見さっしやれ

エンペロープの 雨が降る

四、体育よいとこ皆出てござれ

磯の香もする恋もする

見さっしやれ

波のしぶきに 日が暮れる